

# 『TSUNAMI 現場から日本へことづけ』

## —在日の被災地出身者の走り書き記録—

J.A.T.D. にしゃんた

### I 津波と支援の仕方

津波が起きて、心配して多い日は5、60件近くの連絡が私の携帯電話などに掛かって来た。被災地出身の人間でありながら、すぐには何もできない歯がゆさと周りから何かをやれというプレッシャーの中、毎日のように大使館、領事館とスリランカに電話をかける日が続いた。周りで一齐に募金活動をやっていて、呼ばれては募金箱を持たされた。集まるお金がどのように使われるかもわからず「よろしく願います」と頭を下げた。時には、私たちの横で別の団体が同じ謳い文句で募金活動をしていた。お金をどの団体に入れたら良いか解らず悩んでいる人をもたくさんみた。日本人離れをしている僕の外見も助かって、たくさんの方がお金を入れてくださった。でも、心の中のどこかで、お金を集めることに抵抗を感じていた。

スリランカの津波の現状を把握するための調査に出かけられたのは、被害があって40日が経ってからである。スリランカに着くなり耳に入った情報で少し驚いた。コロomboあたりでバブルが起きていて、膨大な海外からの資金でルピー（スリランカ貨幣）のレートが一時的に上がっていた。今回の調査で、支援活動の現状把握がひとつの大きな関心事だった。限られた一週間という短い期間を有効利用する意味で、先入観をもたず素直に、島の西に位置するコロomboから出発して南に海岸線に沿って車を走らせた。スリランカの南の海岸はゴールデンビーチ（黄金の海岸）と言われていて非常に美しい。

海外線に立地する観光客相手のリゾートホテルが受けた打撃は大きい。しかし、中でもあらゆる意味で一番被害を受けたのは、漁民であろう。身内の死者ももちろん、船が破損し、家が流されていた。彼らのほとんどが、海岸線の不法占拠地にバラック小屋を建てて住む人が多かった。彼らに追い討ちをかけたのは、スリランカ人の魚離れである。いまだ行方不明者が数多く、魚が遺体を食べていると気持ち悪がられていたからである。

道の両側に白い布に黒い墨で垂れ幕たくさん見かける。どこどこに避難キャンプがあるという内容と合わせて、政府などに対する批判か感謝する内容のものも見かける。町が被害を受けたであろう町も簡単な作りの建物で営業活動を復旧させているが、民家の復旧はまだのところが多い。道端には政府の配給の内容を記したポスターが張り出されていた。死亡者一人につきその家族に15,000、生活を始めるための5,000、台所用品を買うため2,500と、一人当たりの食事代として375ルピーが支給されていた。合わせてテントや衣類も支援内容も書いてあった。配給場がたくさんの人で賑わっていた一方で、数人に配給対象として認められなかったと嘆いている人もいる。詐欺まがいのことも起きており、政府側も悩んでいるようだった。

道端で世界的に知られているような組織からの水瓶なども目にしたが、外国からの支援も少なかった。中国の文字が書かれたテントに数カ国の国旗が道方で堂々と靡いていた。家の復旧に取り掛かっているスリランカ人と一緒に混じって活動をしている外国人の集団も見受けた。幹線道路に面している場所で、暑い中上半身裸で作業に励んでいた。笑い声が耐えることなく作業に取り掛かっていた。

会社から休みをもらってスリランカで一ヶ月という期間働いているという青年に話を聞いた。「惨事に関わらず、スリランカ人から元気もらった」。ボランティアはしてあげるだけではなくて、たくさんものが得られると言った。

心の中でずっと待ち続けていた、日本人らしき方を見つけて、あわてて車を降りた。しかし、たずねると彼らは台湾からの団体で、仏教同士の国として助けに来たという人たちの集まりだった。こちららも皆、飛行機代も滞在費も自腹を切った参加者であった。走り回っている支援者がトランス状態にも思えるほど非常にハイになっていた。中でも印象的だったのは、台湾から人々が、支援物資をもらいに来た現地の人々に対して「ボホマストゥティ (ありがとうございます)」って手を合わせていたことだった。私は、彼が何に対してお礼を言っているかわからなかったが、その姿勢がほのぼのとしていて素敵だった。

一週間で被災地を車で1,800kmも走った。悲しかったことに一番会いたかった「日本」に会えなかった。私の知っている範囲では、スリランカの新聞で日本の支援ことが報道されたのは一回だけである。日本外務大臣が金銭的な支援をすると新聞に載っていた記事だけである。日本から多額の援助金を渡しておきながら被災者が日本、日本の温もりを感じていない。調査に同行していた日本人の友人に近寄って「日本は支援をする必要がない」と、ことづけをする人も数人いた。国家を介している分、効率悪く間で横流しされているという国への不信感だと思える。日本の国旗は自衛隊が出動しないと飾らないらしい。SHOW THE FLAGEは、戦争ではなくて、こういうときこそ必要ではなからうか。非常に残念だが、一つだけいえるのは、日本は支援の仕方が下手であることである。

日本が二つの点について反省考え直すべきだと思う。一つは、日本でのボランティアの形態についてである。日本産業の構造改革、失業対策の結果として現われ急成長しているNPOの有償で活動する人を指している。お金ももらって被災地に向かう仕事であり、海外の活動に関しては特に例外を見つけにくい。いつも間にかアメリカ発のボランティアイコール有償という発想に日本も切り替わりつつある。必要なのは、神戸や中越地震に日本人が大勢手伝いに走っている同じ感覚で、無償で海外に走れる人材育成が急務であること。

何かがあるとすぐに募金をすることが日本人の悪いくせになっている。募金を募る組織が大きければ大きいほど、または、大使館など国に近ければ近いほど、信頼が大きいという無責任な発想からの脱出が必要である。たとえば、その地方自治体の属している代表者がお金をもって直接先方に向かうなど、せっかく小回りを利かせて活動ができるのに、実際には、地方自治体の集められたお金でさえ、各国大使館に振り分けているケースが多い。日本が政府に対して渡した80億円に足されるだけである。国際交流はもう古い。民際交流が求められる。一人一人が自己責任においてお金を集め、現地に向かって一緒に汗を流すことが必要なのである。日本人がスリランカのことを心配しているという温もりを伝えていく必要がある。

## II 津波と宗教

スリランカは自他共に認める多宗教の国である。国旗にもすべての宗教を表しているぐらいである。中でも多いのは仏教である。仏教徒であれば最低一日二回は、自宅の仏像の前に祈りをささげる。街の彼方此方に高台から仏像が顔を覗かせる。だいたい仏像と一緒に菩提樹と白く光り輝くストゥーパー (仏舍利殿) がセットになっていることが多い。寺院の前を歩いて通るときは立ち止まって手を合わせることももちろん、自動車に乗って寺院お前を通るときにはごく自然と体が動く。無意識のうちに、座席から腰を上げ、手を合わせる。

コロomboから車で2時間弱車を南に走らせたところにカルタラ寺院がある。お釈迦様が悟りを開く時に背凭れにした菩提樹と同じ苗を植わっていることでもここが有名である。寺院の前を通る人々は、

いくら急いでいても、賽銭を入れて無事を祈ることが習慣づいている。ここで、不思議な現象が起きている。海のすぐそばにあるにも関わらず、この寺院だけではなく町全体に被害はない。この寺院が街を守ってくれたと人々の中で信仰心が以前より強くなっている。

ヒッカドワ近くの列車事故が今回の津波のシンボリックな事柄としてニュースになっている。最初からの乗客とその場で助けを求めて屋根などに乗り込んだ人を合わせて2,000人近くの人がここ一箇所ですべて亡くなった。車両が線路から数百メートル先でバラバラになっていた。もちろん、その地域の一带には家などの跡形も無い。しかし、すぐそばで、宗教寺院と海に浮かんでいる島にある寺院の別館には数枚のかわらが落ちた程度でそれ以外の被害はまったくない。

私の旅がまだまだ続き、キリンダを訪れた。ここは入江であり、津波被害が大きく受けられる条件が整っている。その勢いを物語るかのように、400トンもの船が1,000メートル近く打上げられていた。しかし、死者の数は75人と比較少ないことが大きな驚きであった。ここのお寺にその鍵があった。実は津波のあった12月26日が満月の日で、スリランカではポーヤデーと言う公休日でもあった。仏教徒は皆、ポーヤの日は肉を食べたり酒を飲んだり避け、蚊さえも殺さない。行動を控え、いつも以上に勤める日であり、朝から寺院にお祈りに行くための日でもある。津波が来た朝九時過ぎ、寺院にいた人はもちろん、津波を感じて遅れて助けを求めて寺院に逃げた人が命拾いをしている。これはどこの寺院にも共通している。

実は、このキリンダの寺院が、津波と大きな関係がある場所である。紀元前200年にスリランカで津波があったと記録がある。津波は、海の神様が怒っている解釈されて、その怒りを収めるために当時の王様が愛する王妃を海流に流す。島の西の方から流されたウィハーラ・マハ・デーウィーの王妃が流れ着いたことで有名な場所。日本から来たと言うと、日本で津波が起これないように、皆様を守りますようにとお祈りをしてくれた。

今回の津波で寺院が一つも被害を受けていない。その前後の建造物が跡形もなく壊れている中、堂々としている姿が不思議である。シンハラ語で、「ウェワイ ダーギャバイ オバイ ママイ」っという言葉がある。これは一つの町ができるのに必要な事柄を表している。それは、湖、ストーパーと貴方と私って言う。湖は経済面を表し、ストーパーは精神文化を表している。今回の津波を宗教でもって理解しようとしているスリランカ人が多く、不思議な現象により宗教心が強まっている人が追い。祈る心、信じるものが報われると口々に言う。心のよりどころ宗教心を忘れた日本人にスリランカから学べる事柄のひとつであることは間違いなのだろうか。

### III TSUNAMI に学び、あらゆる壁を乗り越えて前向きに

私が離れた18年前は国営放送しかなかったスリランカの放送局も、今では外国のものも含むと10チャンネルにもなっている。スリランカの民放のテレビ局に勤めるプロデューサーをしている友人に時間を割いて会ってもらった。彼には、津波の際どのように対応したかを聞いたかった。彼に一番聞いたかったのは、津波時の即対応についてであったが、彼になぜか話を逸らされた気がした。私はさらに同じ質問をすると、話を逸らした理由がわかってきた。スリランカの人は津波などの経験をしたことがない。実は、津波がやってきた二時間前の朝の7時ぐらいには緩やかながらスリランカで地震を感じている。しかし日本人含む外国人や外国で滞在した経験があるスリランカ人のみがそれを地震として解釈している。結論から言うと、今回の津波の被害から人々を守るために役立てられなかったのである。テレビ局に対して電話があったそうだが、それも嘘であると疑ったという。生まれてはじめて経験することだったから、迅速な対応ができなかったことに対する責任感を感じている様子でもなかった。スリランカで世界的にネットワークのあるイギリスの(CNN)放送がオンタイムで見られる。実は、CNNでさえ津波予告をしていなかったのには驚いた。

被災後のメディアの役割には目を見張るものがあった。今回の津波が起きて一ヶ月の時点で全国のすべてのテレビ局が手を取り合って、各局の売れっ子のアナウンサーを起用するなどして、長時間にわたる生放送での被災のチャリティーイベントを行っていた。少し遅れる形で、特に被災地の政治家が政党を超えて復興のために東奔西走をしていた。海沿いの不法占拠地でバラック小屋に住んでいた最貧困層の人たちに対して安全な場所で家を与えら得る予定だ。トイレなどがなかったそれまでの生活よりはるかに条件が良いと喜んでいる人も多い。

スリランカのあちこちで、現在までの人間同士の衝突や摩擦が津波を機会に洗い流され、手を取り合って同じ国の幸せのために力をあわせていた。スリランカ人のフットワークの軽さが世界的にも評価されていた。衣類や食事は国内の無数の組織から集められ、海外からの援助に頼る必要もなかったぐらいだ。地元の町長さんが、「もし、火星人でもいてくれたら、外敵に対して、地球人同士で喧嘩をすることがなるだろうね」と今回の津波を経験して人々が一団となっていることの喜びを嘸みしめていた。事実、スリランカの北部にある、日本政府軍と政治組織 LTTE の両方の海軍キャンプが流された。長い間続いた争いごとが津波を機になくなることを期待している地元人が多い。

今回の津波でたくさんの根本的な事柄を見直そうとしている人が多い。今までは無縁だと一度もスイッチを入れることがなかった、日本の ODA で寄付されていた地震測定器のチェックが行われたようだ。人々の宗教心が間違いなく高まった。多数の犠牲者への追悼の意と自然の恐ろしさを次世代に残そうと、2,000人近くの死者を出した列車が博物館と化してすでに観光客でにぎわっていた。珊瑚礁が破壊されていなかった場所への津波の破壊力が弱っているなどのことから、珊瑚を大事にしようとする地元のサーファー団体が中心になって呼びかけている。

自然はそんなにも酷くない。今回は、津波が数回にわたってやってきている。一回目は軽いものでこれでは誰も犠牲になっていない。それから少し時間空けて二回目に大きな津波が来ている。一回目の津波は、神様からの「早く逃げなさい」というプレゼントだった。今回の津波で、人間が括りつけていた動物以外で、動物の遺体の一つも見つかっていない。危険を感じたときにすぐさま逃げず、面白がって海に向かったり、家の金属類を取りに欲を出したりした人が巻き込まれている。優先順位は命に勝るものがない。危険を察し、命を守る本能がどうも人間は退化していて、動物から学ぶべきものも大いにあるようだ。家で飼っていた象が飼い主を背中に無理やり乗せて山に走って命を助かった人の話がスリランカでは有名になっている。人間は本能的に前向きに生きていかないといけないようにできているかもしれない。津波から40日の時点では誰も泣いてなどいなかった。家族の一人や二人亡くなっているのはみな一緒。姿勢は、たくましく前向き。笑顔さえこぼしていたほどで、支援に外部から来ていた人たちを逆に元気付けるほどだ。

津波を機に日本における「スリランカ」の認知度が上がった。日本の新聞の一面にスリランカが登場したのはきっと最初で最後なのかもしれないと思う。今回の報道で、世界地図のどこにスリランカあるのか知った人も多い。たくさんの日本人がスリランカに対して何かがしたいと動き出している。あちこちでチャリティーの催し物が開かれている。日本の地震後に活躍したコミュニティー放送のスリランカの進出を考えていると相談も受けた。スリランカと日本の関係が津波を機に今まで以上に強いものになることを期待している。

津波があつてからは、私のところに一日平均5、60本の電話がかかってきた。このスリランカへの一本一本やさしい思いをいかにスリランカ現地の人に分散し、直接スリランカ現地につなげるかが個人としては大きな課題である。